

ノーマライゼーションの視点から見た障害をもつ人が働く喫茶コーナーの可能性

The Possibility of the Tearoom Corner Where the People with disabilities work, from the viewpoint of Normalization

小林 繁

KOBAYASHI Shigeru

(1)研究のテーマ

ここで言う「喫茶コーナー」とは、1981年に東京都の国立市公民館の一角に「わいがや」という、障害をもつ青年ともたない青年とが共に運営する喫茶店形式のコーナーが設けられたことが始まりとされ、現在このような取り組みが全国各地に広がってきている。従来、主にサービスを受ける側であった障害をもつ人たちが、障害をもたない人にサービスをする。特に接客などの仕事は不可能とされてきた知的障害をもつ人が働く喫茶コーナーは、公民館だけでなく、さらに図書館、美術館、体育館、市役所、福祉会館などの公共施設に設置されることによって利用者層を広げてきている。

この喫茶コーナーは、障害をもつ人たちの働く場としてだけではなく、様々な学びそして交流する場であると同時に、障害をもつ人たちにとっての「たまり場」という重要な機能を担っているのである。ここには喫茶コーナーが、福祉ではなく社会教育施設である公民館から始まったという事情が反映している。すなわち、そこで働くことによってある程度経済的に自立ができるとともに、自らの障害をさらすことで、障害を認め理解し合う場であり、街に住む障害をもつ人たちにとっても、他者の視線などを気にしないで時間を過ごすことができる空間である。その点で障害をもつ人にとって、家と職場だけではない第三の場とでも呼べるような意味と役割を有しているといえるだろう。さらに最近では、精神障害や「心の病」をもつ人たちが働く喫茶コーナーも増えてきており、こうした人たちにとっても喫茶コーナーが「癒し」の場、安心な「居場所」として、地域の中で今まで

以上に重要な役割を果たしていくことが期待されているのである。

本研究では、こうした喫茶コーナーの現在における広がりの実態とそこでの新たな問題や課題について、これまでの調査研究を踏まえ実証的に分析・考察することを目的としている。そのため、主に全国の喫茶コーナーの広がりの実態とそこでの取り組み状況および課題を把握するためのアンケート調査、およびいくつかの先進的な取り組みの見学および聞き取り調査を行った。

(2)アンケート調査の実施と聞き取り調査

喫茶コーナーの広がり状況を把握するため、2003年度は、現在把握している400余りの喫茶コーナーへアンケート用紙を送付した。調査項目は、主に都道府県別の設置状況、設置されている施設の種類（例えば、社会教育や文化・スポーツ施設、福祉施設や作業所、役所関係、それ以外など）、運営団体の種類（市民団体や法人、親の会など）、働いている人たちの属性や障害の状況、そこでの仕事内容と勤務形態、障害に対応した労働条件、客として利用している人たちの様子、運営状況および運営における問題や課題、などである。

あわせて全国の注目される喫茶コーナーの実際の取り組みを調査する目的で、本年度はもっとも数の多い東京をはじめ、神奈川、埼玉のほか、以下のところを見学し聞き取り調査を行った。

①共同作業所「ほっとはうす」（熊本県水俣市）

「ほっとはうす」は、胎児性水俣病患者を中心とした障害をもつ人が働く作業所で、喫茶コーナーの取り組みを中心にしながら障害をもつ人が広く社会につながり、市民との交流をめざす場として開設された。これまで地域の様々なイベントへの喫茶サービスのほか、押し花を使った葉やラベンダーのポプリ作りやパンの販売、さらには市内の学校に出かけて水俣病を伝える活動など多岐にわたる活動を行ってきた。

②岩手県内での調査

宮古市では知的障害者が働いているレストラン「カリ一亭」と小規模作業所「ワークハウス・アトリエsun」を訪問し、それぞれ関係者から話を聞いた。前者は能力のある障害者が一般と同じ条件で働くことができる可能性を示しているし、後者はリサイクルショップと喫茶コーナーをメインに、店を訪れる人が一休みできる空間となっている点が特徴となっている。その他に喫茶コーナーを設置している岩手郡滝沢村の精神障害者通所授産施設「ワーク小田工房」と盛岡市にある精神障害者小規模作業所「ひだまり」を訪問した。

③鹿児島県内での調査

鹿児島市内にある「喫茶あすなろマジック」を訪れ、

関係者から話を聞いた。県内では初めてという公共施設（生涯学習プラザ）内に設置され、主にこの施設を利用する人たちが客となっている。この他に川辺町にある有限会社「萌」を見学した。ここでは、精神に障害をもつ人たちが運営している喫茶コーナーも設置されている店の経営と清掃作業やゴミ資源の分別回収などの請負の仕事、およびワークショップや講演会の企画など幅広い事業を行っている。

④愛媛県内での調査と障害者関係団体からの聞き取り

今治市では、総合福祉センターにある精神障害者が中心となって運営している喫茶コーナー「クリエイト21」を見学した。ここでは喫茶コーナーの運営だけでなく、コーヒーを出前したり、またメンバーを対象としたスポーツ教室やカルチャースクール（陶芸、パソコン、料理など）を開催するなどして、地域で障害をもつ人が文化的にも豊かに生きられる活動を展開してきている。また西条市では自主グループの形態で行われている「喫茶ハーモニー」の取り組みの様子を見学するとともに、関係者の方々から話を聞いた。四国では喫茶コーナーの取り組みはまだほとんどなされていないため、上述の今治市と西条市での今後の取り組みは注目される。

⑤青森市内での見学と関係者からの聞き取り

青森市内にある唯一の障害をもつ人が働く喫茶コーナーである「福祉ショップ西部」は、福祉ショップという形で喫茶の他にも青森県内の福祉作業所などで作っている製品を販売している。あわせて青森市内で開かれた知的障害者の生涯学習サポートセミナーに参加し、喫茶も含め青森県内の特に知的障害をもつ人の学習・文化活動の取り組みの様子とそこでの課題などについて話を聞いた。

(3)次年度にむけて

以上の研究調査においては、喫茶コーナーの広がりや福祉関係団体の運営による障害をもつ人の福祉的就労を中心とした場所づくりと機能を帯びた取り組みとなってきた。しかしながら同時に喫茶コーナーは、地域での障害をもつ人ともたない人との交流の場、障害を学ぶ場そして障害をもつ人のたまり場（余暇を過ごす場）としての役割が大きいことも示されている。この視点から次年度は、回収したアンケートの分析と海外での取り組みを含め、引き続き調査見学を行っていくようにしたい。